



今年は夫の父が召されて33年、母が12年を経ました。息子家族は年度末の仕事が多忙で、命日から30日ばかり遅くなりましたが、3月28日にやっと、両親を記念して全員集合して墓参し、深紅のバラを添えて写真を飾り、会食をすることができました。両親は孫たちには曾祖父母になりますので、記憶や思い出がありません。写真で見ただけです。息子は庭に立つ両親の写真を見て、背景に写っている蔵の記憶が蘇ったようでした。屋敷は河川改修工事により、取り壊されて今はありませんが、夫には思い出深い郷里の家です。私も、茅葺屋根、黒光りして曲がった垂木、囲炉裏、七島イ

グサの畳表、五右衛門風呂、土蔵や畑など興味をそそられました。茶の間から、権現山まで続く田んぼが見えて、風が気持ち良い。そこで、自給自足を図り、DIY をして生活しておられました。

息子に「どんなおじいちゃん、おばあちゃんでしたか」と聞いてみたら、「怖いおじいちゃん」、「忍耐しているようなおばあちゃん」という本当にあっさりとした感想が返ってきました。私には「九州の人間」らしさを感じさせられる義理人情に生きた真面目でホットな人、両親です。



夫が病気になり、転地療養で東京から実家に戻っていた時、私も夏休みの二か月半、1歳半の息子と共に同居し、田舎暮らしを楽しみました。父は無口で、話す時には、すこし甲高い声で、短く言うだけでしたから、怖い感じがしたのでしょうか。時に激しい気性を爆発させることがあっても、情が深く、行動力も物凄い。幼い孫息子のために玄関の広い三和土の垂木に紐をかけ、腰掛ブランコをしつらえ、庭の木の下にコンクリートを混ぜる枠箱を持ってきて、砂を入れて砂場も用意してくれました。そのうえ、お馬さんをしてくれたこともあり、夫は「あの親父が！」と絶句していました。朝早くから自転車に乗って建築関係の仕事に出かけ、帰るとすぐ風呂。ニュースを見ながら一合半くらいの晩酌、囲碁などをゆっくり楽しみました。働き者で、律儀で、健康的な人物でした。

母は自分を病弱と思い込み、その対策に熱心で、「医者知らずと言うでしょう」と言っただけは牛乳、リンゴを必須の食べ物としていました。実際には、働き者で家の掃除はもちろん、野菜を作り、雑草など生やしておかず、医者に通うこともありませんでした。きれいな歯並びで虫歯1本もないのがその証拠です。母は裁縫が得意で呉服屋から頼まれていたくらいでした。旧大連に15年以上も住んでから、引揚げ、この家屋敷を買ったものの、農業する土地はなく、父を助け、必死で働き、質素、儉約に励んでいました。けれども「お父ちゃんの好きなお酒は、切らしたことがない」という妻の愛と誇りを吐露したことがあります。しがらみの強い田舎の付き合いに両親は辟易していたように見えました。子どもの学校の成績が良く、それが秘かな自慢でしたが、愛する子ども達は次々と、郷里を離れ、都会で働き始め、田舎で少し寂しく二人で暮らしていました。

墓前で夫は「引揚げてきて、何も無い中、体を打ちたたいて働き、家族を守った両親であった」と皆に言いました。そして、心からの感謝の祈りを捧げました。二人の真剣に生きた人生を、私たちは誇りに思い、少しでも見習いたいです。

